

氏 名 (本籍)	みず の ゆう し (福 島 県)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5447 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	戦国時代を中心とした武家社会の絵画受容 － 漢画系画題を例に－

主 査	筑波大学准教授	Dr. Phil	長 田 年 弘
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	中 村 伸 夫
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	守 屋 正 彦
副 査	筑波大学名誉教授	博士 (芸術学)	真 保 亨

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、中世末期から近世の武家社会における水墨画の在り方について、受容史の視点から明らかにするとともに、特に武家社会において受容された幾つかの漢画系の画題を軸に、そこに込められた制作者や受容者の意図を考察することを目的としている。

これまでの水墨画の受容史研究は、作品の質や量、文献資料の豊富さのため、将軍家を中心とした支配者階級の研究が多く、その周辺階級を対象とした研究は、十分に吟味されてきたとは言えない。そこで度々問題とされてきたのが「筆様」であった。筆様制作は、中国の絵師を模倣し描かれたものである。画題は、中国の絵師と関連づけられており、画題よりも模倣される絵師が重要視されていた。一方で戦国時代における画題の受容は、ある特定の画題が頻繁に求められていることが禅僧の記録から明らかである。それらは鷹図、帝王図、帝鑑図など、武家が好む画題であった。それらの画題の意味や当時の背景について解釈し、戦国時代の武家社会での絵画受容について考察した次第である。

第一章では、鷹図を事例に取材し、様式の体系化及び流行した背景について考察した。鷹図は、五山文学で見出せるように戦国時代の武家社会において最も流行した画題であった。武家社会における鷹図の受容には禅僧による関与が見られ、画賛などによって中国の思想が意味づけられることで武家社会に受け入れられていったことを指摘した。

第二章では中国帝王像の特に三皇図を黄帝を中心に論じ、肖像表現の成立と展開について考察した。当初禅林において医学の祖として受容された黄帝は本草書系の版本の影響を受けて、その姿が形成され、戦国時代に到ると類書系の版本が数多く舶載されたことと、禅僧によって天道思想が示唆されるに及んで急速に流行していったものと解釈した。

第三章は、帝鑑図に着目し、流行の背景に儒教や五山文学の影響を認め、この画題がどのように社会に受容されていたのかを論じている。帝鑑図は明で刊行された『帝鑑図説』の挿絵が障屏画に仕立てられたもので、宋代までの歴代皇帝の事績が絵画され、近世初期において急速に流行した画題である。先行研究では、近世初期の儒教の流行がその背景にあるとされてきたが、著者は帝鑑図の画題と五山文学の題画詩を照らし合わせたところ、幾つか一致する題画詩を見出すに及んで、中世における中国皇帝の事績を題材とした詩文

や絵画の影響を指摘し、それが、のちに近世の儒教政策と合致し、帝鑑図の流行を見た結論づけた。

第四章では、まず武家間における絵画の贈答の機能に着目し、武家に絵画に関する教養を享受していたのは禅僧と絵師であったと仮定して、禅僧の語録を基に戦国時代において禅僧や絵師がどのような考えの基で制作・受容していたのかについて考察した。その結果、武家社会における画題の受容は、贈答や禅僧・絵師による伝達による絵画の情報の共有化という基盤を介すことによって、禅僧から武家へと絵画の情報が受け継がれていったものと解釈した。

本章で論じた「鷹図」や「三皇図」、「帝鑑図」などは武家教養の画題として戦国期に広く流行を見るにいたったが、武家はただ絵画を所有するだけではなく、禅宗や絵師から絵画に関する知識と教養を学ぶことによって、贈答を行うなど、文化財としての価値を見出していったものと結論付けたのである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

著者は戦国時代における漢画系画題に注目し、絵画の受容者によってその意味が異なるものと仮説し、主題である戦国時代を中心とした武家社会の絵画受容について論じている。例えば大西廣氏が、「布袋」は禅宗にとっては祖師図の一つであったのに対し、武家や茶人にとっては祖師図であると同時に「茶掛」として座敷飾りの一つであったと指摘するように、画題はある特定の社会の中で異なる意味をもって受容されていた点について、武家好みとしての画題を取り上げ、その画題の意味について解釈したのである。

特に著者が注目した絵画は武家が珍重し、鑑賞の中心となった「唐物」と呼ばれた中国絵画であり、名画として知られる馬遠や夏珪の画風に倣って我が国で制作された筆様と呼ばれる中国風の絵画であった。著者はそのような中国絵画や中国風の絵画の受容を、戦国時代に流行した「鷹図」、「三皇図」、「帝鑑図」に注目し、その時代の画題の解釈や、それらの図様の成立について詳細に検討している。

第一章の「鷹図」では図様の和様化、五山における鷹図の解釈と武家社会での受容について、禅僧の関与を指摘し、また武家と鷹狩りについて、その記録化について言及した。第二章では中国の三皇図をはじめとする中国帝王図を武家が珍重するにいたった背景を解釈し、思想史的な研究を援用し、それらの画題の用いられ方を解釈して、天道思想が背景にあったものと推論している。第三章では「帝鑑図」を取り上げ、近世に到るに従って緩やかに儒教の浸透を図ったものであろうと解釈した。さらに、第四章では武家が絵画に対する所有、また贈答などの文化財として珍重するようになった背景について禅宗や御用の絵師が武家の絵画への興味を引き出す媒介的な役割をしたと考察した。

著者は、これまで体系的にとらえてこなかった戦国時代における武家社会の絵画受容について、あらためて考察し、包括的な研究を行っており、新知見を示した点は大いに評価するところである。一方、本研究をさらに深く理解するための資料集成、画賛解釈は今後十分な調査と解釈が必要であり、また武家社会と禅僧のあり方、さらには帝王図、帝鑑図に見られる儒教思想との関連についても、これからの研究の進展が望まれるところである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。